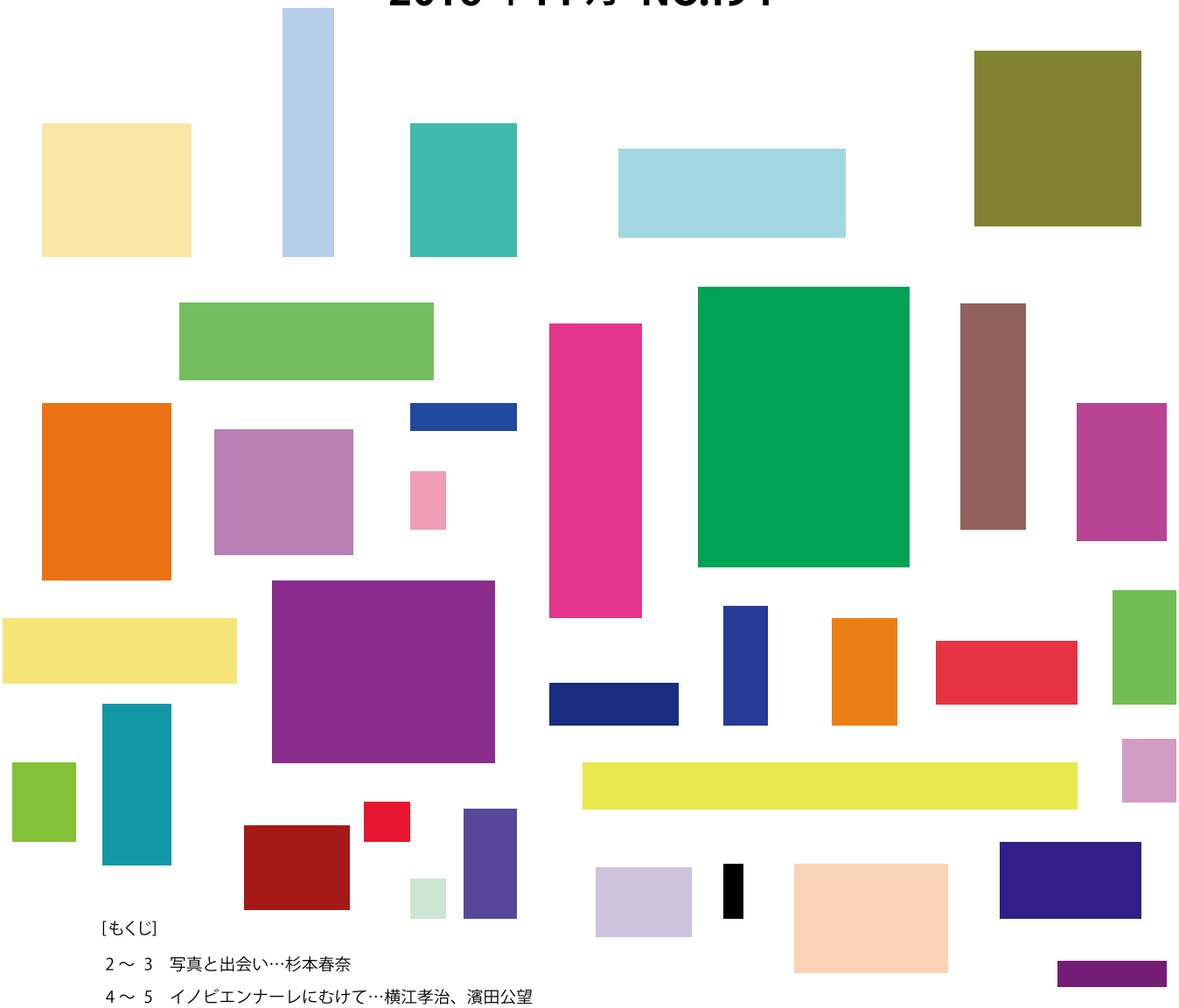
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2016年11月 NO.194



［もくじ］

2～ 3　写真と出会い…杉本春奈

4～ 5　イノビエンナーレにむけて…横江孝治、濱田公望

6～ 7　『お國と五平』上演プロジェクト　顛末記　前編 ー「利賀演劇人コンクール2016」入賞までのあゆみー…西村和洋

8～ 9　第十五回ラ・ラ・ラ音楽祭を終えて…門脇隆彦

10～11　ピノキオさんの生まれた国で（第六回） イタリアと日本と、そしてこれから。…並河咲耶

12～13　高知市文化振興事業団9月の事業から

14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「ブロック」安土華帆

公益財団法人高知市文化振興事業団

写真と出会い

杉本　春奈

写真が見せてくれた世界

私が写真と出会ったのは、小学校六年生の時です。ある春の日、祖父の持っていた小さなフィルムカメラを借りて近所の風景を撮りに出ていました。桜の木が並んでいる風景を撮り、現像された写真には、自分の目で見た風景を超えた美しいイメージが浮かび上がっていました。その体験が写真への興味の始まりでした。

それからレンズ付きフィルム、いわゆる「写ルンです」を買って撮るようになりましたが、思うように写真が撮れませんでした。父が引き出しの中にしまってあった一眼レフのフィルムカメラを引っ張り出して使い始めたり、お年玉を二年分貯めてデジタルカメラも手に入れ、自分がイメージする世界を見るために作品制作に熱中していきました。

個展「17」について

日常的に写真を撮っていた私は、家族もモデルにしていました。妹を撮った一枚がフォトコンテストで金賞に選ばれ、写真展をしたいと思っていた私はこの時の賞金で個展をしようと決心します。十七歳の夏の出来事でした。しかし、写真部に所属していなかったため、何から準備すればいいのか分かりませんでした。展示経験のある大学生に展示の方法を教わったり、会場を探す日々が始まりました。悩んだ末に場所は高知市文化プラザかるぽーとの市民ギャラリーに決めました。幅広い年齢層のお客さんに見てもらえると思ったからです。タイトルは「17」。モデルの友人、展覧会の設営を手伝ってくれた友人もみんな私の同級生でした。

個展の会場ではたくさんの人と出会いました。「この写真集、借り物だけど読んでみいや。明後日取りに来るき！」そう言って去っていった男性が、写真家の岡本明才さんでした。一瞬の出来事にぽかんとしていた私は、何だか変わった人だなと思っていました。岡本さんが置いて行ったのは細江英公の写真集で、三島由紀夫を撮影した『薔薇刑』の格好良さに衝撃を受けました。その後も岡本さんには様々な写真集を見せてもらいました。鈴木理策の『熊野　雪　桜』に収められていた作品など、新鮮なイメージが脳裏に焼き付いて離れませんでした。

美術としての写真

高校生の私は、もう一つ挑戦をしていました。同級生の友人が勧めてくれた公募展への応募です。モノクロプリントの写真作品で「JEANS FACTORY CONTEMPORARY ART AWARD 2005」の優秀賞を受賞しました。この時に初めて、写真家以外の美術作家の方たちと交流をしました。作品制作に対する考え方、表現の多様性に触れたことは、とても良い経験になりました。その後も審査員やディレクターなど関係者の方々と会ってお話しする機会をいただいたり、作品を見てもらうことで、自分の作品について考える時間が格段に増えました。作品について語ることのなかった私は、イメージを言語化することの難しさを知りました。同時に写真の可能性を探るようになり、「美術って何だ、作品って何だ」と考え始め、気になる展覧会はジ

ャンルを問わず足を運ぶようになりました。学校で教わったことのない美術との出会いでした。

沢田マンションギャラリーroom38

私は社会人になってからも作品制作を続けています。二〇〇九年二月、東京・四谷にある写真家たちが運営する「TOTEM POLE PHOTO GALLRY」でグループ展を開催しました。これをきっかけに、高知でも作家が自主運営するギャラリーを作れるのではないかという考えが浮かびました。既存のギャラリーよりもっとシンプルで、作家が望む展示を実現できる自由度の高いスペースです。当時、高知市薊野の沢田マンションに住んでいた岡本明才さんや他の作家さんと、一階の三十八号室をギャラリーにできないか、メンバーを募って会費を集めたら運営ができないか、などを話し合いました。その後大家さんの許可がおりて、二〇〇九年の十一月に沢田マンションギャラリーroom38をオープンし、マンション住人の岡本さんが代表になりました。

タイトル「Sakai#2」,2013年制作

セルフビルド建築として注目されていることもあって、観光客の方が立ち寄ってくださったり、県外からのメンバーの参加にも繋がりました。作家同士の交流は作品のジャンルを超えて、互いの悩みを相談しあったり、意見を言い合いました。やれることは全部、ギャラリーの改装も自分たちの手で行います。壁や床を剥がして新しく作り替えた時には、クリスマスもお正月もほこりまみれになって工事に明け暮れました。私たちが地域で頑張ればアートに興味がある人も、高知で作家活動を続けたいと思う人も増えるのではないかと、ひたすらに活動していました。

繋がる糸

二〇一四年にはギャラリー5周年の企画として「3日間の奈良美智・ドローイングショウ」を開催しました。県内外や海外から二千人を超える人たちが小さなギャラリーを訪れました。翌年には、「European Eyes on Japan/Japan Today vol.16―ヨーロッパの写真家が出会った高知―ALEXANDER GRONSKY+NINA KORHONEN」を企画しました。これは、インディペンデント・キュレーターの菊田樹子さんとの出会いによって、ヨーロッパの写真家の滞在制作に協力したことがきっかけでした。

さらに、スウェーデンのアーティスト・ラン・スペース「Verkligheten」とも交流することになります。スウェーデンの作家が沢田マンションギャラリーで三週間の滞在制作を行い、展覧会を開催しました。今年は私を含むギャラリーのメンバー四名がスウェーデン北部の町ウメオで滞在制作をしました。地元のアートシーンを広げたいという彼らの思いに共感し、交流が続いています。

残念ながら、二〇一六年の十二月をもって沢田マンションギャラリーroom38の活動は終了しますが、今までの活動を引き継ぐ形で新団体を設立する予定です。写真が私にきっかけを与え、様々な出会いによって紡がれた糸は、日本から遠く離れた国へと繋がっていました。新しい出会いの予感を信じて、私は歩き続けていくのだと思います。

すぎもと　はるな
写真家、沢田マンションギャラリーroom38副代表

一レにむけて

イノビエンナーレ公募部門「いの美術展について」

横江　孝治

「いの美術展」という名の公募展をご存知でしょうか？

高知県の中央部に位置する吾川郡伊野町、吾北村、土佐郡本川村。その三地域が二〇〇四年、平成の大合併により新しく「いの町」という一つの町になりました。合併前の各地域にはそれぞれ文化協会というものがあり、それまではそれぞれで文化的活動をしていたわけですが・・・

「文化協会同士、協力して何かできないか？」

そう考えた吾北在住の写真家・山中賢一氏が声を上げ、それに賛同した様々な人を巻き込み二〇〇八年、いの美術展（以下、いの美）は開催されました。以降二〇一五年まで毎年開催。

そして今年第九回目を迎えるはずだったいの美ですが昨年、発起人であり実行委員会会長であった山中氏が世代交代を宣言。それを引き継いだのが筆者を含めた若手達なのです。

現在第九回目のいの美開催を目指しじっくり頑張っています。

さて、簡単にこれまでの経緯を説明しましたが、いの美は第一回から一貫して「新進気鋭作家の登竜門」となる公募展を目標に開催されてきました。同じような目標を掲げる地方展も少なからずあるでしょう。しかしながら、感覚的に言うとこれまでのいの美の意義と目的は、現代に於いて一つの役目を終えたと考えます。そこでいの美はこれから新たに「創造性を競う日常的文化活動」を目的、方針とし来年二〇一七年二月、第九回いの美開催を目指します。

前回から最大の変更点は別事業として行われていた街歩きアートイベント「イノビオーダー」との合併です。この合併に伴い、事業全体としての総称を「イノビエンナーレ」とし、「いの美」を公募部門、イノビオーダーを企画部門と位置づけます。また事業の開催を二年に一度開催のビエンナーレ方式としました。いの美の作品募集要項にも前回から少し変更点があります。年齢、出身地、国籍などの制限を撤廃しました。部門は平面と立体の二部門に統合します。作品のジャンル、表現方法は自由です。応募は事前エントリー制とし、出品された作品はすべて会場に展示します。他にもいろいろありますが書ききることができないので出品希望の方、お手数ですが詳しくは募集チラシをごらんください。賞金もあります！

いの町のランドマーク「紙の博物館」で開催するいの美、いの町民の日常「いの町商店街」で行われるイノビオーダー。結果としてこれらが地域活性や経済効果につながれば幸いです。が、本音を言うとそういうことにつながる可能性は限りなくゼロに近いと思っておりまして、もっとシンプルに、表現の場として「いの町」という町があり、そこで作品を発表、鑑賞することで少しでも創造性の向上、アートリテラシーの向上につながり、そういう文化的活動、創造力こそが衰退する地方には必要なのではないかと思い活動しているわけです。

よこえ　たかはる
美術家、イノビ実行委員会

イノビエンナーレ企画部門「イノビ・オーダーについて」

濱田　公望

二〇一七年二月に行うイノビエンナーレに向けて本格的に始動しなければと思いつつも、参加作家として関わっている大月町での滞在制作など諸々で、いの町からすっかり遠ざかっていた。そんな中、高知新聞の記者の方が、イノビエンナーレについての取材、撮影をしてくれるとのことで、久しぶりにいの大国さま隣りに佇むギャラリーコパに向かった。

コパの窓ガラス越しに、屋根が崩れ落ち半壊している西岡倉庫が目に入った。倉庫といっても外観は古民家然とした佇まいで、いの町の古い町並み感を大きく演出していた。そこは二〇一四年十一月、二〇一五年十月にそれぞれ行われたイノビ・オーダーのメイン的な会場だった。

イノビ・オーダーとは、私が企画・運営に携わっている、二〇〇八年、二〇一二年～二〇一五年のこれまで五回、いの町内で行ったアートイベントの名称である。約十日間の会期中に、いの町内の様々な会場で平面・立体・写真・映像など様々な分野のアーティストが、作品展示やパフォーマンス、ワークショップなどを繰り広げる。

イノビ・オーダーは、第一回いの美術展の関連企画として、高知市から三十三号線沿い仁淀川橋手前の今はなき西岡古民家（現・西岡寅太郎商店）を会場に、高知県内の作家十名のグループ展という形で始まった。

二〇一〇年頃に瀬戸内国際芸術祭のような知名度のあるものから、各地の自治体主導、作家主導のものなど大小様々な地域系アートプロジェクトが全国的に勃興した。そんな時流もあり、二〇一二年にイノビ・オーダーは〝拡がりと繋がりから新しい価値を発見する町歩きアートイベント〟として規模を拡大した。いの町観光協会や商工会、町民の方々の協力を得て、いの町商店街周辺の古民家、空き店舗、倉庫、ギャラリーなど約十カ所が会場となり、高知県内外の三十名以上の作家が参加した。それ以降、マイナーアップデートを繰り返し二〇一五年まで開催した。

二〇一六年六月、アートと町について一度総括しようという試みで、紙の博物館にて白紙展という企画展を行った。これまでイノビ・オーダーやいの美術展に関わってきた作家や町民二十二名が参加した。

こうした経緯を経て、二〇一七年からイノビ・オーダーは、イノビエンナーレというその名の通り二年周期のアートイベントの一部門になる。

役場が新庁舎になり、町の上をバイパス道路が新たに抜けた。冒頭に書いた西岡倉庫が今後修復されるのか、このまま取り壊されるのかは分からないが、これまで展示会場として使用してきたいくつかの場所はもう無くなっている。イノビエンナーレは、アートの持つ創造性や同時代性、批評性を通じて、変容するいの町の現代的なローカルカラーを見出していきたい。

はまだ　こうぼう
映像作家、イノビ実行委員会

『お國と五平』上演プロジェクト　顛末期　前編

―「利賀演劇人コンクール2016」入賞までのあゆみ―

西村　和洋

二〇一六年二月一日、藤岡武洋は喜んでいた。前日、横浜市で行われた第一回の「神奈川かもめ短編演劇祭」に出場した行正忠義率いる地元高知の劇団「シャカ力」が「演出賞」を受賞したという知らせに、「地域の力と可能性を見せた」とはしゃぎ気味のメッセージが送られてきた。日本劇作家協会が後援し、韓国や全国から選ばれた演劇団体が短編作品の成果を競う全国大会で、国内唯一の団体として入賞したことをかねてからの仲間として誇らしく感じていたのだ。「負けていられませんねえ。僕も頑張らねば……。」という藤岡は、高知市南金田に位置する「蛸蔵」を拠点に活動する「シアターTACOGURA」を主宰し、ちょうどイプセンの『民衆の敵』の演出を手掛けている最中だった。

私や藤岡は初期の高知演劇ネットワーク・演会の仲間として高知県立美術館と協働し、二〇〇五年の（財）地域創造主催による「舞台芸術活性化事業『ヘッダ・ガブラー』」に取り組んだ経緯があった。イプセンの『ヘッダ・ガブラー』は舞台芸術財団演劇人会議（公財）の理事長でありSPAC―静岡県舞台芸術センター芸術総監督であった鈴木忠志氏（いずれも当時）や故・斉藤郁子氏、また高知女子大学の鈴木滉二郎氏（当時）らの「是非に」という強い勧めもあって実現したものだった。

これには最初たじろいだ。利賀芸術公園での上演が条件になっていたのだ。利賀村での上演?!「世界の演劇の聖地」とも称される利賀村で上演するなんて。しかし、斉藤氏は「演出家には中島君が良いんじゃないかしら?」と当時SPACに所属していた中島諒人氏（現・鳥の劇場芸術監督）を高知に送り込んでくれた。私たちはこの出会いに、今でも大いに感謝せずにはいられない。中島氏が残してくれた多くの示唆は、直感のみに頼って作品づくりをしていた私たちを大きく変化させ、今でも演劇に向き合う核となっている。

利賀村での上演は大成功。その成果に鈴木忠志氏は、SPACでも上演してはと声を掛けてくれた。しかしリタイヤする者も現れたので、私は新たにカミュの『誤解』を提案した。中島氏も面白がってくれ、静岡での上演も成功。翌二〇〇六年には、日中韓の持ち回りで開催される東アジアの演劇祭であるBeSeTo演劇祭（ソウル開催）に、『誤解』をという話が持ち上がり、高知の演劇人にとってこの上ないチャンスとなった。結果、ソウルの上演も無事に終えたが、課題も感じた。成果には違いない。が、やはりそれは中島氏の力や鈴木忠志氏らの支援が大き過ぎた。「地元高知の演出家を育てなければならない」。

高知の若手で、これからの演出家と呼べる人材は藤岡武洋しかいないと思った。空間に対する緻密な捉え方やデザイン力、何より俳優の身体感覚を読み解く力が他とは格段に違っているからである。セゾン財団の助成も得られたこともあり、二〇〇七年と二〇〇八年には高知城二ノ丸に特設の野外ステージを組み、藤岡が演出し泉鏡花の『天守物語』の上演を行った。市街地の中心にありながら、静かで広い空間であり、祝祭性にも富み、舞台芸術の空間としての活用は非常に意義深く感じられるものだった。

また、「地元高知の演出家を育てなければならない」と思う一方、舞台芸術活動の意義も考えたとき、そこにどんな意味があるのかという疑問も生まれた。作品制作の必

要経費をまかなうために、観客動員することに終始している状況があるのは事実だ。知り合いや友人のポケットをアテにして、自分の趣味を達成しているのと同じではないか。芸術活動は地域づくりに貢献できるのか？その条件は何か？自問自答した結果、舞台芸術活動を一旦中止し、高知県立大学大学院で文化政策の研究に入ることにした。

大学院では高知市春野町西畑における「西畑人形芝居保存会」の活動を事例に、保存会と地域の人々の関係の広がりに着目した。入場料収入を取らない保存会がどのように経営され、地域の人々に受け入れられ、人々が保存会の活動を支えているのか。インタビューを重ね、地域に伝わる文化活動が核になり、地域コミュニティのソーシャル・キャピタルの広がりに繋がることを発見し、感銘を受けた。一方、やはり自分は演出家なのだという思いも新たにした。また、藤岡も、二〇一四年九月、蛸蔵を拠点に専属の劇団「シアターTACOGURA」を旗揚げし、足許を固めていた。

二〇一六年三月一日、「利賀演劇人コンクール2016」の課題戯曲が発表される。演出力によるコンペティションである。入賞すれば演劇人会議の支援を受けられ、国内外の劇場プログラムでの上演の機会も与えられるプロフェッショナルのコンクールだ。現在の条件からすれば谷崎潤一郎の『お國と五平』しかないという結論が出た。

エントリーシートの〆切は三月三十一日の必着。しかし、『民衆の敵』の演出に没頭していた藤岡は、エントリーシートを書く余裕がなかった。三月二十九日になって、どうなっているかと督促すると「全然書けてない、諦めの境地」という返事。「今からやれませんか？」という。二人して徹夜で取り組んだ。藤岡は「ともかくエントリーするだけで十分」、「実際の上演は出来なくてもいい」。気がつけばもう三月三十日の朝であった。

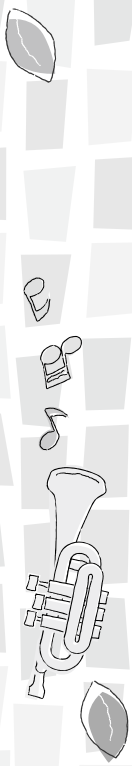
四月二十三日の朝、一次審査を通過したという連絡があった。上演会場は「リフトシアター」という。よりによって、廃止になったスキー場のゲレンデを会場にしただけのだだっ広い野外の空間で、スキーのリフトの大きな柱がただ並んでいるだけの場所である。溜め息が出る。あの巨大な空間と戦わねばならない。

『民衆の敵』を終えたばかりの「シアターTACOGURA」に、すぐさま挑戦するだけの体力はなかった。そこで「『お國と五平』上演プロジェクト」を立ち上げることにした。出演者の一人は山田憲人。池田友之丞を演じる山田は、高校時代に太宰治の小説『駈込み訴え』を一人芝居にして、全国大会の上演まで漕ぎ着けた経験がある。お國を演じる鈴木みのりは東京在住。鈴木は三月、かるぽーとで上演された故・松本雄吉氏の演出作品『PORTAL』を観るためにたまたま帰省していた。鈴木は普段雑誌のライター等の仕事をしているが、高校時代にはベケットの『クラップの最期のテープ』を一人芝居で上演している。そんな無茶をする高校生は後にも先にもいない。それ以降演劇の出演経験などはない鈴木だが、「条件的に今の高知にお國を演じられる者はいない」と藤岡は断言した。鈴木もまた身体をとおした「言葉の表現」で、新しい何かをつかめるのではないかと考えていた。残るは五平役。八方手を尽くしたが誰もスケジュールが合わない。そもそも歌舞伎の台本として書かれたテキストである。『お國と五平』は、演じることに慣れていない者が簡単に取り組める作品でもない。藤岡は、出し抜けに「五平を引き受けろ」と私にいった。はい？どだい無理なプランだ。舞台に出演したことなどもう二十年以上ない。「じゃ誰が責任を取るんですか」という。「出来るものなら僕が出ますよ。でも僕は今回演出ですから。演出家としてエントリーしているわけですから――。」なかば絶望的なプロジェクトだと思いながら、上演の準備に入っていった。

にしむら　かずひろ
演出家・「おさらい会」主宰
舞台芸術財団演劇人会議会員、高知市文化振興審議会委員、高知演劇ネットワーク・演会初代代表（二〇〇一年～二〇〇九年）

第十五回ラ・ラ・ラ音楽祭を終えて

門脇　隆彦



二〇〇二年に「よさこい高知国体」のプレイベントとして産声をあげた高知街ラ・ラ・ラ音楽祭、大雨の中無事第十五回目を終える事が出来ました。

第一回は五会場、五十組でしたが、年々参加者が増え、今年は十一会場で百五十組のミュージシャンが街を音で彩ってくれました。約五百人のミュージシャンが、東ははりまや橋商店街会場から、西は丸ノ内緑地会場まで、楽器を片手に闊歩する姿は、まるで街全体がライブハウスになったようでした。

私と「ラララ」との出会いは、大阪から高知にUターンした年に、父がパンフレットを持って帰ってきたことが始まりです。これは楽しそう、来年は必ず出演しようと思い、第二回から参加しました。

出演してみると、野外のなんとも言えない開放感、街のあちこちで音楽が聞こえてくる高揚感、一気に「ラララ」の魅力に取り付かれました。第三回からは実行委員にも誘っていただき、演者と裏方の両方で「ラララ」を楽しむことになりました。

いざ裏方に回ると「お祭り」を作り上げていく楽しさ、苦労、多くの方の援助やお力を借りて成り立っているのを痛感しました。

第八回からは実行委員長になり、当初からの「まず自分たちが楽しめるお祭りを」というコンセプトを一層推し進めるために、思いつく限りのことをやってみました。

まず、全てを透明化し共有すること。実行委員会は純粋にボランティアの集まりで、いわゆる専従がいないことが弱点でもありましたが、情報を共有する事で責任を分配しつつ、手抜かりの無いように皆で確認し合う。その上で、経験年数や年齢に関わらず、それぞれの得意分野で力を発揮してもらう。今では少しずつ若い実行委員も増えてきて、新しい発想や提案で組織も活性化されてきました。そのような変化を経て、個々の持つ「ラララ」に対する想いを集約し、形にするのが私の役目になりました。

また、私自身も第二回からずっと出演していますが、多くのミュージシャンが参加したくなる魅力的な音楽祭にするため、各会場の雰囲気作りや機材の充実などに力を入れました。

幸い「ラララ」を楽しみに毎年参加してくれる方々がたくさんいます。参加するために一生懸命練習して、年々成長していくミュージシャンを見るのも嬉しい限りです。リピーターの数がモチベーションにもなっています。

平成二十五年、各高校の軽音学部が正式に高知県高等学校文化連盟に加盟したのを機に、高校生とのコラボを始めました。選ばれた五組の高校生バンドが大人たちに混ざって演奏します。これはなか

なか双方に刺激や交流ができ、いい結果が出ています。

今年は、さらに若い人の力を借りようと、高知大学の軽音サークル「BLUE SKY」に会場の一つを任せました。すると、そこは学園祭のような雰囲気で、普段あまり接する事のない学生たちと大人たちの交流が生まれ、今までにない面白い会場になりました。また、企画・運営の経験は学生にとって良い学びの機会にもなると思いますので、これからも協力関係を築いていこうと考えています。

そして、極め付きは後夜祭にスタッフ全員が出演して「ラララ」を楽しむことです。今までは一部のスタッフが「ラララオールスターズ」として演奏していましたが、みんながステージ側からの景色を観ることが大切だと気づいたことから、演奏ができなくても、ダンサーやコーラス等、何らかの形で全員が一度は「演者」の側に回ることにしたのです。

今年は高校生や先生、大学生にボランティアスタッフも加わり、総勢五十名がAKB48などの演奏で歌って踊る姿は圧巻でした。

また、岡崎高知市長も、「ラララオールスターズ」のゲストボーカルとして、毎年参加してくれています。高校生や大学生が市長と一緒にステージにたつのは、良い経験だと思います。

子どもから大人まで、また、学生からいろんな職業の方まで、「ラララ」の開催日にはすべてのひとに同じ時間が流れています。あちらこちらで挨拶をしている姿や、歓談している姿、みんな笑顔です。準備などの苦労はこの瞬間に吹っ飛びます。

最近は街中での音楽祭も様々な場所で行われるようになりました。高知街ラ・ラ・ラ音楽祭のあり方、これからの展望など、個人的な想いはありますが、「まず自分たちが楽しめるお祭りを」であり続けることが全てだと思います。

世代が変わっても、この想いが受け継がれる限り、高知を代表する「お祭り」になっていくことでしょう。

かどわき　たかひこ
高知街ラ・ラ・ラ音楽祭実行委員長

ピノキオさんの生まれた国で（第六回）
イタリアと日本と、そしてこれから。

並河　咲耶

秋空のパリよりこんにちは。芸術の秋、皆様いかがお過ごしでしょうか。

今回は連載最終号ということで、「文化高知」編集部の皆さんから頂いた質問に答える形で、私は一体何をしたいと考えているのか、私なりに分析してみたいと考えました。

アメリカへの留学が始まった十五歳、「様々な土地へ赴き、その土地の人達と関係を築くという楽しみ」（第二回）を知り始めた頃から、現在に至るまで、やはりこの楽しみのために生きているといっても過言ではない私ですが、

Q　印象的な事例

は数知れずあります。例えば、留学を始めたばかりのころ、飛行機で隣の座席に座った柔らかな物腰の中年アメリカ人男性と、言葉を交わしていると唐突に「ボストンの方に向かっているでしょう？」と尋ねられました。この便は、アメリカ国内での乗り換えが必要で、直接ボストンに向かっていたわけではありませんでした。それなのに、なぜこの人は私の目的地を見破ったのか…？ 答えは簡単でした。「君のその〝ｙａｈ〟という言い方は、ボストンの方の特有の言い方だよ。」

些細なことなのですが、私にとっては、目から鱗、非常に衝撃的な出来事でした。私のような外国人にですら染み付いてしまうアクセントや訛り、言い回しなどがあり、自分では気づいていなかったけれど、実はその地域の文化に染まっていた、ということに気づかされたからです。

このような発見は、行ってみないと分からないことの一つで、例えば今、仕事でパリに来ていますが、「フランス人はフランス語が話せないと冷たい」というのが真実なのかどうか？ ということは、実際にフランスに来て、色々な人と話してみないことには分からないものです。真実のように思えるときもあれば、そうでもないときもある、ということを、身を以て体験し、芸術を介して、言語を超えた次元で交流をする。それこそが、子ども達のための公演やＷＳを企画招聘する原点かもしれません。特に私は、たまたま海外と文化と触れ合う機会が多くあったので、海外のアーティストを出来る限り招聘したいと考えています。まだ頭がかちかちになっていない子ども達が、日本にいながら訳の分からないものに触れる機会が増えたらと願っています。

そう思うきっかけとなった、

Q　子どものための舞台芸術の活動を通して、最も顕著に子どもの変化が見られた事例（前後の様子など）

が二つあります。一つは、淡路島でのワークショップです。イタリア語しか話すことの出来ない（英語も通じない）講師に対して、ワークショップの終わる頃、小学校中学年くらいの男の子が、あまりにも自然に日本語で色々と質問をしていたときです。周りにいた大人達が、「ダリオさん、日本語分からないよ。」と言わなければ、きっと話し続けたであろう彼は、明らかに、イタリア人の変なおじさんと言語を超えて繋がっていました。この体験は、このワークショップを日本国内で継続的に行っている最大の理由でもあります。

もう一つは、私が舞台・子ども・通訳に関わる原点となった現場です。大学を卒業し、アメリカから戻ったばかりの頃、イギリス人の演劇教育家らが、広島県三島市の子ども達と数日間のワークショップを経て、舞台作品を創るという企画に通訳インターンとして参加した際のことです。ここでは、講師が話す英語をいかに子ども達に分かりやすい直感的な言葉に出来るかが問われました。頭でっかちな言葉や回りくどい表現が通用しない子ども達に対峙するための言語感覚を研ぎ澄ます試練となりました。この発表の後に、「私も大きくなったら、サヤみたいに通訳になりたい」と言ってくれた参加者の女の子がいて、その一言のおかげで今の私があるといっても過言ではありません。

現在、私の仕事の七割は、テアトロ・インプロヴィーゾの一員としての公演やＷＳで行く先々で、

Q　様々な国の子ども達と触れ合ってきたと思いますが、ワークショップや公演など、国によって子ども達の反応の違い（国民性）というものを感じたことはありますか。

と聞かれます。でも、実は、あまり感じません。今までで一番面白かったのは、チュニジアでの公演で、リズムが取れる音楽がかかると、自然と皆で拍子をとる、という現象ですが、それ以外には、随分違うなぁということはありませんでした。例えばフランス国内でも、パリ郊外の中国系・アフリカ系移民が多いところもあれば、内陸部や山間部のほとんど人種差異がないところ、また、他の国でも様々な環境で上演してきましたが、三歳から五歳くらいを対象にすることが多いせいか、子ども達の反応自体はだいたい同じで、先生と子ども達、ないしは親子の関係性の違い、または劇場慣れしているかどうか、ということの方が浮き彫りになってきます。この先生はとても信頼されているな、とか、このお母さんは単なる時間つぶしで来るわけでなくて、公演を見に来るのが好きなんだな、とか…それは、子ども達が劇場に入ってきた瞬間に分かることです。

そんな、

Q　子ども達や、これから社会へ出る若い世代へ伝えたいこと

これは、アーティストとしてというよりも、母として、毎日のように我が身を振り返りながら考えていることで、私自身が母から教わったことを振り返る機会でもあります。中でも一番覚えている「人からされて嫌なことは他人にしない」という言葉。この基準はとても公平で、娘に対して私も言います。「それはダメだよ」「なんで？」「だってあなたも同じことされたらイヤでしょ？」「うん、イヤだ。分かった」と納得できるからです。

それに加えて私が娘との生活で心がけているのは、「ありがとうを素直に示す」こと、そして「笑顔を忘れないこと」です。これはアメリカに留学したての言葉がほとんど話せなかった頃に習得した技ですが、奇遇にも、先日パリに来るためにミラノの空港に向かうバスの中で隣に座ったイタリア人老婦人にも同じことを言われました。フランス語は出来るの？と聞かれたので、ほんのちょっとだけ、と答えると、「そう、でも、Bonjour と merci が言えれば、後は素敵な笑顔さえあればなんとかなるものよ」と。日本ではなぜか実践が難しいように感じられますが、本来は、何よりも重要なことではないかと思います。娘にも、こうした他者への敬意、配慮、理解する努力を怠らない人になってもらいたい、それこそが真にグローバルな人材への近道であると考えます。

この考え方は、実は私自身の、

Q　アーティストとしてのこれからの目標

にも繋がっています。アーティストとして、母として、企画者として、色々なことをしていますが、自分がやりたいと思うことを、いかに持続可能にしていくか、そのための環境をどうやって整えていくのか、周囲へ還元していくのか、そんなことを日々自問しています。何屋か分からない、と思われることも多くありますが、幸運なことに、自分が面白いと思っていることだけに関わって生きています。だからこそ、きちんと感謝すべき相手に感謝し、素直に、笑顔でありたいし、ブレたり、妥協したりすることなく、コツコツと出来ることを継続していきたいと思っています。

人生をかけて、完成することのない一枚の絵を描き続けるために、その絵が常に美しく変化していくために、感覚を研ぎ澄まし、直感を大切にしながら日々を積み重ねていきたいものです。

これまで一年間、読んで下さった皆様、いつも助けて下さった編集部の皆さん、ピノキオを描いてくれたアーティストに感謝して、連載を終了したいと思います。どうもありがとうございました。

なみかわ　さや

日本で生まれ、高校・大学とアメリカで異文化の洗礼を受けた後、帰国するも、現在はイタリア在住。合同会社 konjac 代表として、舞台や文化に関わる翻訳・通訳業務、日本へのイタリアのアーティスト招聘事業を行う。イタリアでは、ダリオ・モレッティ氏の主宰するテアトロ・インプロヴィーゾでピアノ・打楽器演奏、経理を務める。一児の母。ご意見・ご質問等、お待ちしています！

konjacinternational@gmail.com
www.teatroallimprovviso.it

9月の事業から

「Takeshi Sato ローラーアートの世界… 2016 in Kochi」

ホームセンターで売っているペイントローラーとカラーペンキ、特別な道具は使わずに、その一本で、それだけで、人物や風景を描く。しかも、だらだらと時間をかけたり、下書きをしたりするのではなく、音楽一曲が終わる五分～十分の間に描く。それは、多くの人の目を釘付けにし、立ち止まらせることができる。それだけではない。描く一つ一つの線は、それが何を描いているのかが分からない。だからこそ、できた瞬間に絵を浮かび上がらせることができ、観客の喝采を浴びるのだ。

彼は、壁画職人として順調に仕事をこなしていた。しかし、世の中のプリント技術が大きく発展していく中で壁画を続けていくことに限界を感じだした。絵筆で壁画を描くパフォーマンスをしてみるが、人は長くは留まらず居なくなる。途方に暮れていたある日、アトリエの壁に絵筆で絵を描いた。三十分近くかかったが、白の壁に戻す時は、あっという間だった。その時、使っていたのが、ペイントローラーだった。このローラーで絵を描いたら…数分でできるのではないだろうか?! 初めて描いたバラは、人に見せられるものではなかったが、五分で描けた。ここに可能性を感じ、技術を磨き、今に至る。

彼の名は、さとうたけし。世界を驚かすアーティスティックなパフォーマーとして、二〇二〇年東京オリンピックの大舞台で、さらなる喝采を浴びる可能性を秘めている。

今回、九月十七日～十九日の三日間で、かるぽーとを中心に十二回のライブパフォーマンスを行った。その作品の一つは、ゲリラパフォーマンスを行った金高堂書店に。そしてもう一つは、本事業に協賛いただいたセブンデイズホテルプラスに、それぞれ展示され、高知に確かな足跡を残していった。また、高知で歩みを続けるために…。

二〇一六年九月十七日(土)～十九日(月)
高知市文化プラザかるぽーと七階
市民ギャラリー第三展示室
〈入場者数・五百二十名〉

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul(カル)ちゃーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間１公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付

会費 １年間 3,000 円 (4 月 1 日～ 3 月 31 日、年度途中での入会でも 3 月 31 日まで)

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

第百八十回市民映画会

九月二十二日（木・祝）、二十三日（金）かるぽーと大ホールで第百八十回市民映画会が開催されました。

市民映画会は、高知で未公開の文化の薫り高い劇映画を低廉で提供することを目的に、一九五一年より開催しています。

高知市立中央公民館の発足と同時に始まっており、これまでに三百五十九本の映画を上映しています。

今回の上映作品は「キャロル」と「マリーゴールド・ホテル～幸せへの第二章～」でした。

一九五〇年代のニューヨークを舞台にした「キャロル」では、女優たちの美しさもさることながら、華やかなセット装飾・衣装が観客を存分に楽しませてくれました。当日販売したパンフレットも好評で、来場者の満足度の高さを窺い知ることができました。

また、三年前に市民映画会で上映し、人気だった「マリーゴールド・ホテルで会いましょう」の第二弾「マリーゴールド・ホテル～幸せへの第二章～」は、七十歳以上の名優たちのパワフルな演技が印象的で、さらに劇中では、登場人物の様々な恋愛模様も描かれていて、リチャード・ギアには客席の女性もハートを射抜かれたことでしょう。クライマックスは、インド映画の定番ダンスが盛り上げ、前作以上に元気を与えてくれる作品でした。

次回は、来年一月二十六日（木）・二十七日（金）に開催します。名優カトリーヌ・ドヌーヴ待望の主演作「太陽のめざめ」と、「ロイヤル・ナイト」をお楽しみに。

（C）NUMBER 9 FILMS (CAROL) LIMITED / CHANNEL FOUR TELEVISION CORPORATION 2014 ALL RIGHTS RESERVED

高知市文化振興事業団 出版物のご案内

高知の農業

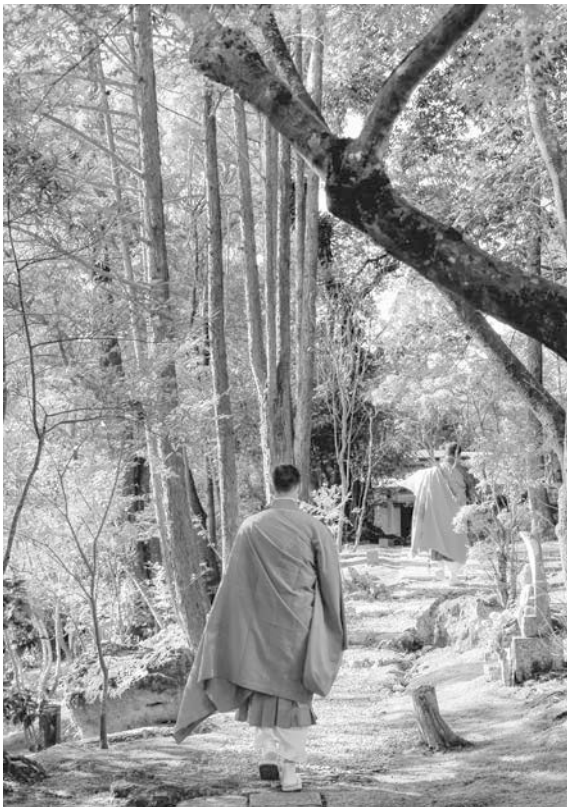
山岡 浩　著

―「県民とともにある明るく堅実に生きる農の素顔」を

高知県農業の実像を明らかにするとともに、特徴的な産地づくり事例を紹介するなかで未来の農業の在り方を考える。（平成九年刊）

価格 1,944 円（本体価格 1,800 円＋消費税）

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち
高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071 へ



高知を撮る

第32回写真コンテスト入賞作品

色づく秋の竹林寺　（平成27年12月高知市竹林寺）　中島　慶治

高知市竹林寺での紅葉の風景です。2015年は温かい日が続き、12月になってやっと紅葉しました。

美術館の存在

風俗歳時記

芸術の秋も深まり、県内各地の美術館や文化施設では、企画展やイベント、演奏会などが盛んに行われている。春開催の高知市文化祭に対し、県の芸術祭は秋。県内全域でさまざまな芸術の秋、文化の秋を彩る催しが開かれている。ここでちょっと「美術館の存在意義」について、考える機会があったことを記したい。

高知からアプローチがしやすい中国地方と言えば岡山。その岡山県倉敷市に、西洋美術品を収蔵する私立美術館では、日本で最も歴史の古い大原美術館がある。高知の人たちにも人気の美術館だけに、足を運んだことのある人も少なくないだろう。しかし、大原美術館が、戦時中も密かに開館をして、戦地に赴く兵隊たちの心の拠り所となり、一方で、日本の至宝と言われた美術品を疎開させざるを得なかった事実までは、ほとんど知られていない。この事実は、地元の民放のテレビ番組によって明らかにされた。

戦争に行くということは、これからの命の保証はないということ。岡山に赴く学徒兵に、出征直前わずか数時間の自由があった。娑婆で過ごす最後の時間、「大原美術館で、美術品を見る」そう決めていた学徒兵。今、私たちは、半日後に命の保証がないとしたら、いったい何をするだろうか。そのわずかな時間に、美術鑑賞をするというのはどんな気持ちなのだろうか。思いを巡らせてみると、一般に言われる「芸術・文化で癒される」といった表現が、なんとも軽く感じる。そもそも美術館とは、「心の拠り所」だということだ。

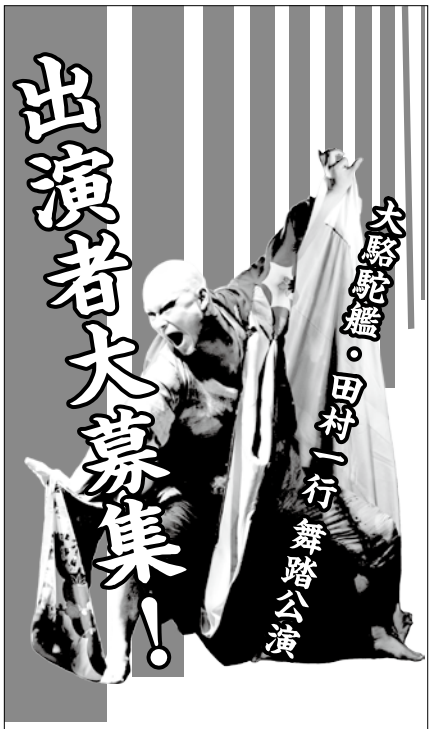
芸術祭を開催しても、芸術の秋と言っても、毎年一部の芸術・文化愛好者だけが文化施設やイベントに足を運んでいるのではないか。私も文化行政に携わっている人間として、その芸術・文化の重みを多くの県民に伝えていかないといけないと猛省する。

（立花香）

卵をとるのはだあれ？

初演から21年を迎える、観客参加型、大笑いのファンタジースペクタクル！
子どもから大人まで一緒に楽しめる、生命の温もり、愛と優しさが詰まった物語です。

【日　　時】2017年1月15日(土)14:00開演
【会　　場】高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
【入 場 料】全席自由　通常価格 1,500円　会員価格 1,350円
【お問合せ】高知市文化振興事業団　088-883-5071



世界で活躍する舞踏カンパニー「大駱駝艦」舞踏手田村一行による高知公演への出演者を募集します。
ありのままで、どうぞご応募ください。
一緒に舞踏の世界を創りましょう。

募集人員｜10名程度
応募資格｜初心者歓迎・ダンス経験不問
稽古（応相談）・本番に参加できること
応募方法｜必要事項（氏名、ふりがな、性別、年齢、郵便番号、住所、電話番号、e-mail、一言メッセージ）を記載の上、下記応募先へ直接、郵送、メールまたはFAXで
応 募 先｜高知市文化振興事業団「舞踏」係まで
※月曜日休館（祝休日の場合は開館）
〒780-8529　高知市九反田2−1
TEL:088-883-5071／FAX:088-883-5069
e-mail:kikaku@kfca.jp
http://www.bunkaplaza.or.jp
応募締切｜2016年12月20日（火）17：00必着
公　　演｜日時：2017年2月12日（日）15:00開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと 小ホール

風伯

今更、世界一の汚名

外国産の食材をたくさん置いている店でドイツの缶ビールを見つけた。よく見ると外国産のノンアルコールビールで値段を見て驚く。なんと百円であった。しかもその成分を見てもういちど驚く。なんと大麦とホップだけしか入っていない。なにを今更！という御仁もいるとは思うが、日本のノンアルコールビールや糖質ゼロとか謳っているビールの食品添加物を見ると、ちょっと恐ろしくなってしまうのだ。

こんな話をどこかで聞いた。海外で作られた、ある日本への旅行ガイドブックには「日本の野菜は農薬をたくさん使っているので食べないように」と書いてあるそうだ。もう少し踏み込んで、「日本製のお菓子や食品は、発がん物質などが含まれる化学合成添加物が入っているので買わないように」とも書くべきだろう。

日本の食は、なぜ石油が原料であったり薬品やバイオを使った添加物だらけになってしまったのか。他人のせいにするつもりはないが、食品添加物の旨味に舌がならされていて、昆布や鰹でとった出汁を見分けることさえ出来なくなっている。「調味料（アミノ酸等）」にしても店頭の食品には必ずといっていいほど入っている。「等」に何十種類もの添加物が入っていても「等」で済んでしまう。

外国では猛毒か、毒性が強いとして禁止されている添加物が、日本ではいまだに出回っている。今更だが、ちなみにアメリカの食品添加物の数は一四〇種類、イギリスは一四種類に押さえられ、日本は八〇三種類、その数世界一という野放し状態だ。

（霖）

今号の表紙

「ブロック」

安土　華帆

文化高知には、様々な情報が多く載せられているという意味を込めて、それぞれ色や形の違うブロックを配置しました。

（あんど　かほ／
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生）

文化高知 No.194
2016年(平成28年)11月1日発行 [隔月発行]

公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869